

昭和44年3月卒業

第39期

昭和42年秋季～43年夏季



チーム紹介

伝統ある名門

県北では38年に甲子園出場の伝統を持つ名門。部員17人、投手陣が豊富なこと、攻守ともに力が揃っていることが自慢。今年になってからの戦績も県北大会、春の全県選抜大会、市内リーグ戦で優勝、東北選抜、能代選抜両大会で準優勝するなど、先輩チームをしのぐ実績をあげている。主戦の山田は頭脳的な投法、二塁兼リリーフの佐々木は試合度胸がありきわどいコースをカーブと直球をまじえて好球し、制球力もすばらしい。また、控えに速球とドロップの信太、藤島と下手投げの山城と5人の投手があるので、相手チームによって入れ替える作戦。攻撃で光るのは、これまでの試合で津谷が本塁打2本、金野が1本を飛ばしているほか、全員むらなく打ち、チーム打率も3割近い。守っては完全に近い三遊間をはじめ外野手は俊足揃いで守備範囲も広い。球に食いついていく勝負根性が出てきたので昨年の準々決勝以上の試合ができるよう張切っている。戦績は13勝2敗1分。

◎昭和42年

・秋季県北

能代 4 - 7 能代工

◎昭和43年

・春季県北

能代 6 - 0 大館南

能代 5 - 2 十和田

能代 9 - 1 能代工

決 勝 能代 4 - 0 大館商

(5年ぶり4回目の優勝)

・第16回全県選抜（12校出場）

能代 9 - 2 由利工

能代 4 - 3 秋田市立

決 勝 能代 4 - 2 大曲

(4年ぶり2回目の優勝)

・東北大会（盛岡市）

能代 8 - 2 八戸工

準決勝 能代 0 - 3 大山形

・能代選抜

能代 9 - 4 大曲農

能代 8 - 2 能代工

能代 3 - 6 秋田市立

・第50回全県大会（41校出場）

能代 5 - 0 五城目

能代 6 - 2 大館鳳鳴

能代 7 - 0 角館

準決勝 能代 7 - 0 秋田南

決 勝 能代 1 - 8 秋田市立

能代	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1
秋田市立	2	5	0	0	0	0	0	1	×	8

（能代）佐々木・藤島・山城・信太

・清水

（秋田市立）高橋一竹谷

〈部長〉小山 善一・青山 輝彦

〈監督〉太田 久

〈部員〉3年生

・清水 吏 山田二三雄

小中 幸次 豊沢 明

小林 了 金野 俊明

以上が佐々木昭夫 津谷 正和

新田 雅博

樽子山グラウンド

佐々木 昭夫

雨上がりの電車の窓に、田園の中の緑濃い松と建物が飛び込んできた。高塙にある母校の瀟洒な校舎である。私が通ったかつての風格ある木造の学び舎は今はなく、跡地には文化会館が建ち、汗と涙が滲み込んだグラウンドも中央公民館となっている。なぜか足は樽子山に向った。

芝生の上を歩き、大樹となった桜を見上げると我が青春の日々が、次々と脳裏に浮び上がってくる。

昭和41年、甲子園を目指す初々しい若者25名が、真新しいユニフォームで伝統ある野球部に入部した。最上級生は大男達で、その背中はさらに大きく感じた。

練習が始まり、新入部員はグラウンドの端で球拾い。しばらくすると「鬼」?と言われた太田監督が現れた。その指導法は、中学校時代から先輩によく聞かされていたため、「ガンバレよ」の一聲に新入部員に緊張が走った。これが監督との最初の出会いだった。

甲子園出場という目標に向っての厳しい練習、一方では人間の生き方、礼節の大切さも厳しく熱く教えられた。練習の休みは元旦だけ。夏休みは灼熱の太陽の下、「ランニング」と声高々の号令で全員がトラックを走り出す。「止め」と指示があるまで延々と何十周も走り続け、最後は意識朦朧状態。途中で伸びる下級生もいた。

冬はストーブもない部室で、前日の汗でバリバリに凍ったアンダーシャツとユニフォームに着替え、能代公園までランニング。猛烈な吹雪の中、膝まである雪を蹴散らしダッシュを繰り返した。皆夢中だった。

グラウンドでの練習は、捕球の基本を身につけるため、グラブをはずし素手で取る。このノックはきつかった。特に外野手の手は赤く腫れ上がり、バットも握れない程だった。

暗くなれば、石灰をまぶしたボールでノックは続く。ボールがよく見えず、全員が耳を澄まして

ノックバットの音を聞き、今度はボールの落下音に耳を立て、中継プレーで最後にキャッチャーまで返球しなければならない。ところが不思議なことに、暗くてよく見えないボールがキチンと返ってくるのである。集中力の鍛錬であった。

まだ練習は終わらない。暗闇になれば、バックネット裏に自動車やバイクを持ち込んでダイヤモンドを照らし、延々とベースランニングが始まるのであった。

25名の新入部員の中には、学業に専念、故障で断念した者も多く、最後は9名となった。

豪打で小生の投球を嫌がらずに受けた主将の清水、器用で俊足巧打の豊沢と新田、玄人はだしの津谷と金野、努力家の小林、ここ一発の山田、陰で支えたマネージャーの小仲、何の取り柄もない小生佐々木。

43年夏、50回記念大会の県予選決勝で1対8で秋田市立校に敗れ、甲子園出場ならず。

振り返れば、どんな苦境にあっても耐えられる精神力の原点は、まさにこの「樽子山グラウンド」にあったのだと、改めてその地を踏む足に熱いものを感じた。

最後に、監督をはじめ、関係者のみなさまに感謝を申し上げるとともに、松陵会の発展と能高野球部の甲子園での校歌齊唱を大いに期待します。

「熱と、力と、団結が…」

豊 沢 明

能代高校創立80周年誠におめでとうございます。樽子山の母校を卒業し、早いもので36年経過、当時を懐かしく想う今日この頃です。母校を「学業」でと言うより「野球部」を卒業した感がある私の「野球人生」を振り返ってみたいと思います。

1 野球とのかかわり

思い起こせば私の人生は野球なしでは考えられません。私と、野球とのかかわりは能代第一小学校の4、5年生頃からと記憶しております(今で言うスポ少です)。その後、第一中学校、能代高校、

そして秋田銀行に入ってからは社会人野球、現在も360歳野球では国体を目指し、又450歳、500歳野球でも現役選手として軟式野球を続けております（いわゆる野球気違い、野球バカです）。

2 私の野球経歴、球歴について

◇小学校時代

現在のように大きな大会は無く、ただボールを投げ、打っていた。

◇中学校時代

1年と3年の時に全県大会に出場しました。3年の時は1番センターで出場、結果3回戦で敗退。

今は時効なので言えますが、中学校時代の野球部での印象は、残念ながら野球では無く、上級生のシゴキ、体罰経験です（要はレギュラーでない人の下級生への欲求不満のはけ口であつたと思っています）。そのため自分たちが上級生になった時は、「野球一筋に専念しよう」とした、と記憶しています（善し悪しは別）。

そんな時代に野球に対する「情熱」、「野球とは何か」、「野球の基本」、「楽しさ」、「苦しさ」、そして「負けた時の悔しさ」など何となく分かりかけ、迷うことなく甲子園へ出たい一心から名門能代高校野球部へ進学（野球部へ入部）いたしました。

◇高校時代

ここからが本当の勝つための野球の「厳しさ」、「苦しさ」、「楽しさ」、を経験させていただきました。

監督さんは、皆さんご存じ現在松陵会会长の太田久監督です。先頃までは島崎監督率いる宿敵金足農業の田沢湖合宿が有名でしたが、当時の県内では能代の太田久、大館商業の三浦第三監督が、厳しさ、激しさを競っており、今考えると、気違ひざたの練習をしたと言うより、させられたと言うのが実感です。

1年生の時、上級生には皆さんご存じ、後にプロ野球に進んだ山田・大沢両選手と同じ時間を過ごさせていただき、誇りに思っていると同

時に当方が懐かしく思い出されます。

実は1年生の時野球部を退部した経験があります。理由は色々あり省略しますが、元来の野球好きであり数ヶ月後再入部、おかげでその後は、すばらしい高校野球を経験させていただきました。おかげさまで3年生になってから負けたのは練習試合を含め3回と記憶しております。その1回が夏の予選決勝で、甲子園出場は夢と消えました。

最後に高校時代の太田監督の教えで忘れられない言葉があります。何かと言えば「熱と力と団結が俺たちの全てだ」。と言う言葉です。合宿等での食事前には毎回全員で唱和することで、部員全員の意識高揚、統一を図っておりました。今で言うマインドコントロールです。

◇銀行入行後

2年間は軟式野球で、2年目に全国から46チームが出場する全国軟式野球大会に出場、前年の国体優勝チームの名古屋相互銀行に勝ち、その勢いでベスト4へ進出。3年目から硬式、いわゆる社会人野球に変更、当時の後楽園球場、現在の東京ドームを目指しました。メンバー全員が硬式経験者であり、変更後2年連続東北大会には出場しましたが、いずれも当時東北No.1であった富士鉄釜石に敗れる。3年目、チームは県予選で敗退したが、自分はJ.Rに補強され東北大会に出場、しかしここでも敗退。

その後10年間頑張ったが、どうしても東京ドームへは行けず社会人野球を引退しました。その銀行の野球部も諸事情から昨年廃部になりました。

現在は、軟式野球の壮年（40歳以上）の部で「秋銀クラブ」に所属、県内ではほとんど負け知らずで、9年間でミニ国体4回、関東東北大会にも6回出場しております。又、他のチームにも所属しており数年前からは神宮寺で開催される500歳野球にも出場しております。

以上が自分の野球経歴、球歴です。甲子園、東京ドームへの出場はないものの、これまでの野球生活40数年間で誇れることといえば

- ①ほとんどケガをしなかったこと
- ②打撃では1番のほかは3、4、5番いわゆるクリーンアップより打たなかったこと。
- ③手は遅かったが、足が速く盗塁での失敗がほとんど無く、高校3年間での失敗は1回だけと記憶しています。
- ④太田監督はじめ良き指導者、諸先輩、同僚に恵まれたこと。

3 自分にとって野球とは

小学校時代より40数年もの間なぜ野球をして来たか?出来たか?を考えて見ました。ほかのスポーツも楽しいと思うが自分には野球が一番楽しかった。

その理由は、

- (1) 1試合の試合時間は3時間——しかし、全力で体力を使う時間は、野手で10分程度と言われています。残りは、次の打球方向、投手の球種等常に頭で考えている——(バカは無理ということです)。ですから自分は野球をやってこれました(冗談です)。
- (2) チームとして一番大事なのは個々の実力はもちろんですが、最終的に勝つ為にはチームワーク。お互いを補うことが要求される。一送りバント、ベースカバー、スライディング、肩の強弱、足の早い遅いメンバーのカバ

ー等々。

(3) 自分が選手でありながら、監督の立場になりゲームプランが出来る。——自分でればこの場面では、打て、待て、バント、エンドラン等々。

(4) 団体競技であれば何でも同じと思いますが、チーム全体での練習はもちろん、帰宅後等独自の練習が大事であり、その結果、チームの勝利に繋がるし、自分の技術の向上(バッティング等)にもなり、より上を目指すことが出来た。

4 終わりに

以上、私の野球人生、野球について感じていることについて色々述べてみましたが、自分にとって野球は、小学校時代から現在まで欠かすことができない存在であり、又これまでの人生で野球を通じ、いろんな人(先輩、同僚、後輩、他チーム、野球ファン)と出会い、指導教訓を受けたことで、現在の自分が存在していると思っております。

今後とも野球をこよなく愛し、仕事はもちろん、野球も体力の続く限り全力がんばって行きたいと思っております。

最後に、母校がしばらく遠ざかっている「甲子園出場」への道を後輩に委ね、そして叫び続けたいと思います。

昭和45年3月卒業

第40期

昭和43年秋季~44年夏季

チーム紹介

実力を誇る県北の強豪

去年県大会の決勝で惜敗しているだけに「今年こそ甲子園出場を」と意気込んでいる。38年甲

子園出場、39年東北大会優勝と伝統を誇り、今年も攻守とも先輩チームに劣らない実力を持っている。主戦信太は切れのいいカーブと打者の胸元をつくシュートが決め球。控えの山城はカーブとドロップが得意で、ともに制球、完投力は十分。

打線は全員むらなく当たっているが、とくに上位は選球眼にすぐれて変化球打ちもうまい。守備は内外野とも充実しており、中でも三遊間は堅い。練習試合ともことし11勝2敗で県北一の強豪だ。

◎昭和43年

・秋季県北

能代 9-0 大館工

能代 5-0 鷹巣農

能代 5-0 花輪

能代 1-4 大館商

・全県選抜

能代 4-3 秋田市立

能代 6-8 横手

◎昭和44年

・春季県北

能代 2-0 大館工

能代 11-1 米内沢

能代 5-4 大館商

(2年連続5回目の優勝)

・全県選抜

能代 0-3 金足農

・能代選抜

能代 6-7 秋田商

・全県大会

能代 2-1 大曲

能代 5-1 秋田市立

能代 7-5 大館南

能代 4-2 経大付

代表決定戦

能代 6-8 秋田商

能代	0	0	0	0	2	3	0	1	0	6
秋田商	2	0	2	0	4	0	0	0	×	8

(能代) 信太・藤島・信太ー三浦

(秋田商) 石塚・三浦ー岩川

〈部長〉 青山 輝彦

〈監督〉 太田 久

〈部員〉 3年生

○小松 文明 山本 実

信太 慎一 柿崎 清貴

船山 誠 藤島 良一
沢田石義晴 藤谷 実
三浦 正喜

根性の能代

船山 誠

中学2年の昭和40年に、初めて能代高の硬式野球を見た。

それは今までと違いスピード、パワー、練習量そして選手の迫力と身体の大きさにビックリした記憶がある。

その当時、野球好きの兄が在学していて、練習を見て来ていた投球動作や打撃フォームを半ば強引に教えられた。

あれからもう40年近い。まさに「光陰矢の如し」である。

さて、昭和42年に晴れて入部したものの、持久力のなかった私は練習についていくのに必死でした。

その練習は予想を遥かに超えて厳しく、ダッシュやベースランニング、また冬期練習の能代公園での走り込み、うさぎ跳び等々の限界までの挑戦は今に始まったことではないだろうがハードだった。それでも、「花形選手?」を目指し歯を食いしばって練習した。

また、夏の大会が近づくと「甲子園組」と言われる先輩達が大勢手助けにやってきた。勿論、我が野球部のバックボーンである「吐血奮闘的精神」を学び、「親父」と言われる太田監督のスバルタ野球を乗り越えた人達が、容赦なくノックの雨を降らしたものだ。

こうして3年間厳しい練習を重ねてきた。ミスを許さない厳しさは、ややもすると萎縮してしまう傾向にあったが、知らず知らずに試合を捨てない粘り強さが育ち、精神的にも大きく成長したにちがいない。

それを見事に実践できた試合が秋田市立高(中央)戦だろう。市立高には、前年決勝戦で敗退している。リベンジ戦とはいえ、甲子園大会でベス

ト8入りした時の本格派投手を擁し今大会の本命であった。

八橋球場は、2回戦好カードとあって内、外野席とも超満員となり否応なしに闘志をかきたてられた。

試合は、初回に1点を先制され、膠着状態が続いたが8回表に一気に爆発した。クリーンアップの怒濤の3連打、更に畳みかける攻撃や戦術で一挙に5点をもぎ取り逆転勝利した。まさに崖っぷちに追いつめられたとき、監督に鍛えられた「精神力」がものを言った試合だったし、辛く厳しかった練習も一遍に吹っ飛んだ瞬間でもあった。

翌日の「秋田魁新報」で、次のように評している。
根性の能代、秋市立を制す!!

「それにもしても能代高の激しい闘魂、勝負根性はすさまじく、非力のナインが持てる力をグランドで十二分に發揮した………」と。

その後、順当に勝ち進むも代表決定戦に破れ、またしても甲子園の切符を手中にできなかった。ただ、能代高校硬式野球部員として鍛えられた「精神力」と「誇り」は、私の財産であり、人生の礎になっていることは言うまでもない。

能代高校硬式野球部の更なる活躍を期待する。

戦ってみなければ判らない

山 本 実

秋田県立能代高等学校が、創立80周年を迎えることに心から御祝とお慶びを申し上げます。また、この記念すべき創立80周年に能代高等学校硬式野球部の「松陵会史」に寄稿させていただけたことに感謝をいたすとともに喜びを感じております。

私自身、毎年球音漂う春を迎え、また夏の甲子園予選が始まると30数年前の思い出が必ずよみ返ってきます。

私が2年生の時、昭和43年秋の全県選抜及び東北大会地区予選を兼ねた1回戦の相手は、秋田市立高校（現在の秋田中央高校）であった。優勝候補に挙げられていた秋田市立高校は、この年の夏、私の1年先輩達が、甲子園を前に決勝戦で

敗れた相手であった。

決勝戦を制した秋田市立高校は、甲子園でも順調に勝ち進み準々決勝では新浦投手（元読売巨人軍）を擁す静岡商業高校に敗れはしたが互角に投げあつた2年生投手（高橋千秋氏）が健在、前評判でも秋田市立高校の優位は揺らぐことはなかった。

しかし、「勝負は戦ってみなければ判らない」。我が能代高校は、4対3で勝利をおさめ夏の屈辱を果たすことができた。秋田市立高校とは、翌年3年生になった夏の甲子園予選大会で再度顔を合わせることになった。

シード校の秋田市立高校では、能代高校さえ敗れば他のチームは「何ら問題ない」とさえ豪語し、特に我が能代高校戦には相当の神経を使っていた。バックネット裏には、相手監督、主将、スコアラー等が我が校の試合を観戦していた。そして、決戦の試合が炎天下の八橋球場で開始された。

この年も前年度同様に大本命は秋田市立高校であり、また大黒柱である相手高橋投手の剛速球とシュートボールは、更に凄さを増し評判通り他チームにとては驚異であった。

1回の表、トップバッターの私が打席に立ち、審判のプレーボールのコールとともに投じられた初球のストレートボールは、瞬きひとつ、うなるような音を発してキャッチャーミットに納まった。

この試合は、1回の裏に秋田市立高校が1点先取、1対0のまま終盤の8回表を迎えた。我がチームは、相手投手の投じるインコースのボールは捨て、外角球1本に的を絞る戦法を取っていた。そして8回の表、遂に相手投手を攻略した。

この回の先頭打者（3番—藤谷実）から始まった3連打でノーアウト満塁とし、次打者に対して苦しまぎれに投じた相手投手のシュートボールが死球となり遂に同点に追いついた。ゲームの流れは完全に我が校に移り、更に相手守備陣の乱れなども重なりツーアウトながらも塁上にはランナーが埋めつくされていた。

そして、私にとても忘れない思い出となつた打席が回ってきた。

当時はまだ木製のバットが使用されていた時代であり、私がこの大会に持参していたバット2本は、すでにこの試合で折っていた。他の選手のバットを借りて打席に立った私へのカウントは、ノーストライク、ツーボール。ベンチの太田久監督のサインをみたら「ヒッティング」「打て!!」であった。左打者であった私への第3球目は、真中、やや外角よりにシート回転で入ってきたストレートボール。振り抜いた打球は、相手野手（ショート）の頭上を越え左中間を抜ける走者一掃の二塁打となり、この回一挙に5点を奮い大逆転、勝利を確信した。

翌日の秋田魁新聞の見出しが、「根性の能代、秋田市立を敗る」「8回、高橋を攻略」「捨て身の外角打ち」が新聞紙上の一一面を飾った。

トーナメント形式の高校野球、特に夏の甲子園予選は「戦ってみなければ判らない」という言葉を

「思い知った」、また「思い知らしめた」のであった。

秋田市立高校に勝った我が校は順調に勝ち進んだが、西奥羽大会への出場をかけた代表決定戦で秋田商業高校に8対6で敗れ甲子園出場への夢は絶たれた。

その後、後輩達が夢を実現し、幾度か甲子園出場を成し遂げた。

しかし、最近の県内高校野球は、中央地区数校の力が勝っていることは否めない。

今年は創立80周年の年でもあり、是が非でも甲子園出場を成し遂げ、この記念すべき節目の年に松陵健児の名を記すことを後輩達に期待をしたい。

最後になりますが、この編集に大変な時間と労力を費やされた先輩達の皆様方に心から感謝を申し上げます。

“戦ってみなければ判らない”



チーム紹介

戦 力

投手伊藤は、176cmの長身からの速球が武器。故障がちで、まだ完投したことはないがスタミナはある。

打線は好投手にかかると鳴りをひそめるが、相手が気を抜けば猛打が集中する。庄内、近藤、東海林の1～3番までは3割をマーク、4番伊藤は本塁打3本、5番原田は2本。

守りは若さを暴露して凡ミスを出すことが心配。中心になって引っ張る選手がほしい。猛練習でだいぶまとってきたが、三遊間がややあまい。

●昭和44年

・秋季県北

能代0-4十和田

●昭和45年

・春季県北

能代4-5米内沢

・能代選抜

能代0-4大曲農

・全県大会

能代0-3金足農

金足農	0	0	0	0	0	0	3	0	0	3
能代	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

(金足農) 佐藤・高野—三浦

(能代) 伊藤・中田—近藤